

平成30年度、令和元年度の 発達障害児者地域生活支援モデル事業 の取組成果

～ICF情報把握・共有システムを使った
地域支援体制づくり～

碧南市福祉こども部
福祉課発達支援係

碧南市の状況

発達支援体制

(R1.4月時点)

平成29年度福祉課に発達支援係の設置
(18歳までの子どもの発達に関する窓口)

- ①保護者支援(発達相談、講習会)
- ②支援者のスキルアップ(巡回支援、研修会)
- ③他機関の連携

＜市長マニフェスト＞
発達障害児対策の
充実

児童発達支援センターは未設置

障害児相談支援事業所2ヶ所

児童発達支援
3ヶ所

放課後等デイサービス
6ヶ所

保育所等訪問
支援事業所 1ヶ所

親子通園施設(市単独)1ヶ所
早期療育親子支援事業1ヶ所

発達障害児の支援に力をそそぐ

いろいろな発達支援を実施しているが
中にはうまくいかないこともある。

その原因は・・・

他の機関（場面）の
子どもの姿を
知らない

それぞれの専門性の
視点の相違、専門用語の
違いなどがある

支援方法の
共有がされて
いない

子どもの共通理解につながらない

関係機関の連携がうまくいかない

子どもの困難さの解決につながらない

H30年度～
ICF情報把握・共有システムを活用したモデル事業を実施

ICF (国際生活機能分類) とは

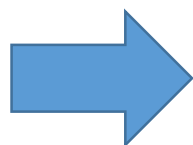
(International Classification of Functioning, Disability and Health)

WHO 「障害」の考え方の転換

<今まで>

障害は人の中にあるもの

障害があるから
「支援」が必要



<2001年～>

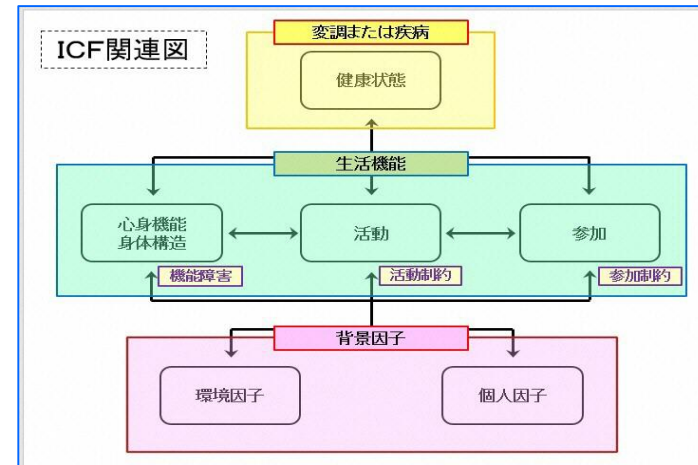
障害は環境との間に
生まれてくるもの
(障害者権利条約も同じ考え方)

暮らしやすい環境がないと障害(困難性)
が増悪! ... だから「支援」が必要

ICFは図だけでない。
それぞれ情報把握の項目がある。

↓
項目が膨大(全部で1424項目！)

↓
日本では、研究開発チームにより、
支援に活用できるような研究開発が
進められてきました。



知的障害者、発達障害者の支援に おける多分野共通のアセスメントと 情報共有手段の開発に関する研究

日本医療研究開発機構
平成27年度～29年度
精神障害分野研究開発事業

研究開発チーム: 安達潤(代表)、井上雅彦、内山登紀夫、
神尾陽子、近藤直司、志賀利一、山本彩

ICFの視点に基づく情報把握・共有システムの研究開発
～知的障害・発達障害児者支援における多領域連携の実現に向けて～

安達潤, 発達障害研究 第40巻第4号(1), 336-351, 2018

ICF (国際生活機能分類) (WHO, 2001)

(International **C**lassification of **F**unctioning, Disability and Health)

ICF情報把握・共有システムとは

(碧南市事業ではICFシステムと呼称)

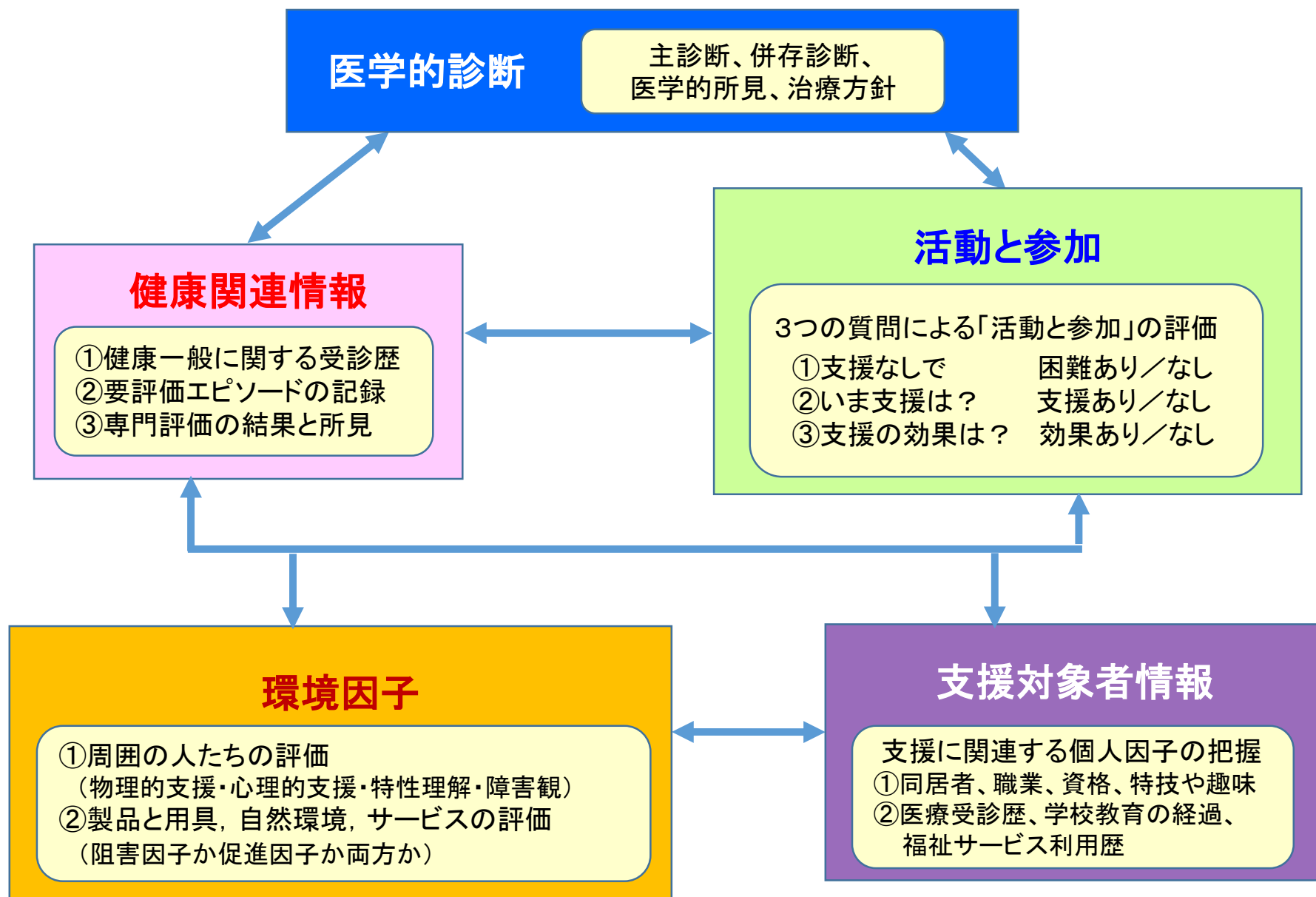
碧南でのキャッチフレーズ

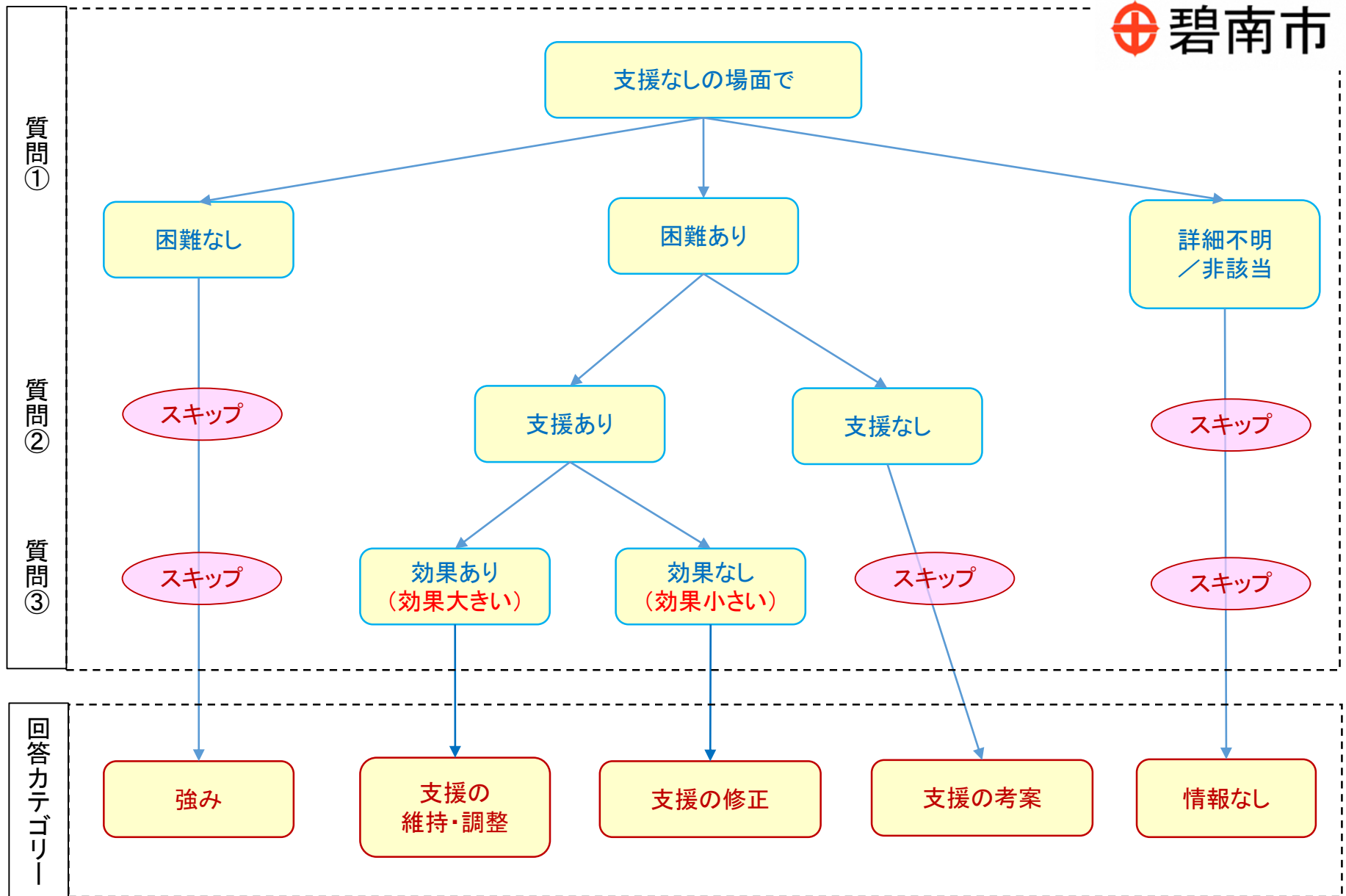
Iitoko (いいとこ)

Chanto (ちゃんと)

Fueteiku (ふえていく)

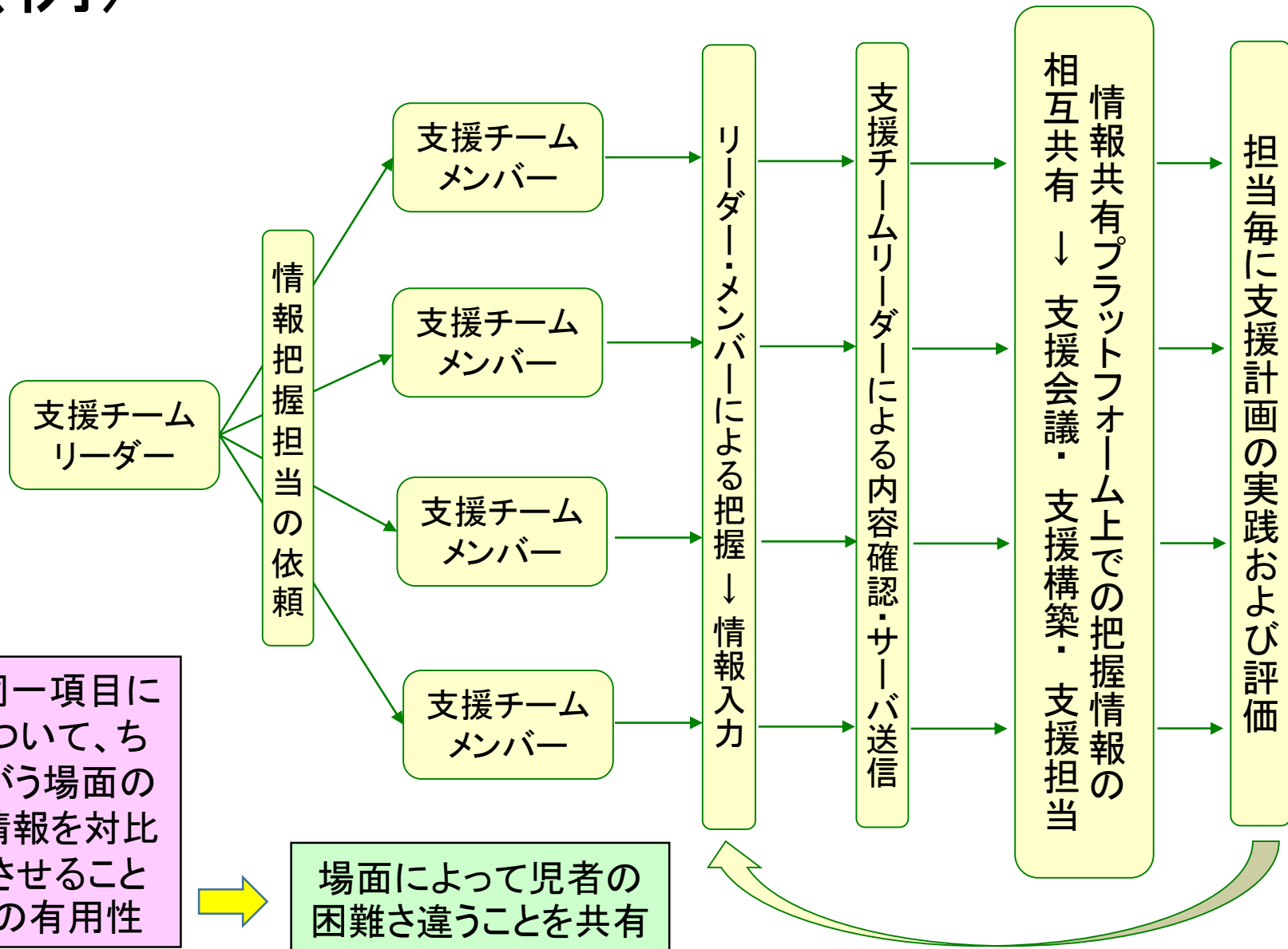
情報把握・共有システムの構成



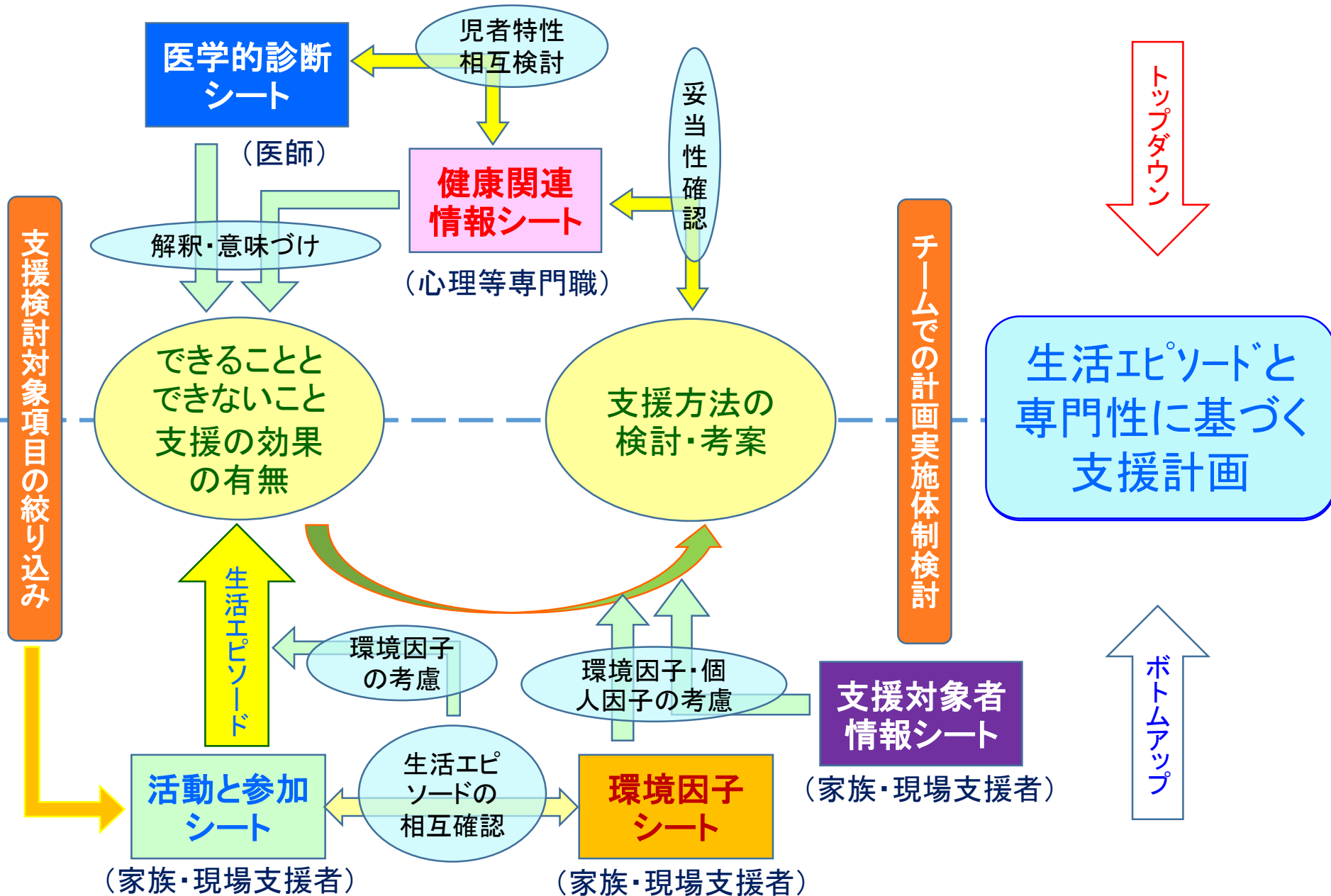


活動と参加の情報把握手順と回答カテゴリー

分担情報把握・共有体制・支援プロセス (例)



支援構築におけるボトムアップとトップダウンの統合



平成30年度

ICF（国際生活機能分類）を活用した療育支援事業

親子支援教室と親子通園施設の早期療育に通う子ども（モデルケース）に対して、ICF情報把握・共有システムを活用し、支援関連情報を把握、関係者共有し、効果的な支援構築とその実践を行った。

結果

支援の質の向上

- ・見立てが多角的に（環境調整支援の視点）
- ・支援検討会議の質の向上
- ・個別支援計画の具体性が向上

多領域連携

- ・共通の視点で支援の検討
- ・支援の統一

保護者の変化

- ・子育てに前向きになった
- ・子どもとの関わり方が改善

ICFシステムの活用で、地域支援体制を充実していけるのではないかと

令和元年度 ICF(国際生活機能分類)を活用した地域支援体制づくり

ICFに関する研修と幼児期および学齢期の児童にモデル的にICFシステム(安達、2018)を活用することで、碧南市地域支援体制の充実を図り、家庭・教育・福祉の連携を目指す。

ICF研修

- 1 参加者:市内の発達支援に関わる支援者
く幼稚園、保育園、福祉サービス事業所、相談支援事業所、
保護者団体、行政(福祉課、こども課、学校教育課)＞

29名が参加

- 2 講師:北海道大学大学院教育学研究院 安達 潤 教授
- 3 日程:7月12日、8月22日、11月8日 9時半～15時
- 4 内容

＜1日目＞【情報収集編】

- ①子どものよさを伸ばすには ②ICFシステム活用の具体的効果
- ③ICFツールを使った情報収集の方法解説と実技

＜2日目＞【第1回支援会議編:「会議資料作成」】

- ①第1回支援会議の事前準備(情報の分析、支援検討項目の決定方法、支援会議資料の作成方法)
- ②第1回支援会議の進め方

＜3日目＞

【今年度のモデル事業の状況報告】

【会議進行テクニックの紹介】

【第2回支援会議編:「支援がうまくいく条件、いかない条件を見出す」】

モデルケースにICFツールの活用

＜ケース1＞

- ・幼稚園 男児
- ・診断名:自閉症
- ・支援チーム構成:相談支援専門員、幼稚園教諭、児童発達支援事業所支援員、主治医、保護者

＜ケース2＞

- ・小学校 男児
- ・診断名:自閉症スペクトラム、注意欠陥多動症
- ・支援チーム構成:相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、児童クラブ支援員、主治医、保護者

＜ケース3＞

- ・小学校 男児
- ・自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害
- ・支援チーム構成:相談支援専門員、小学校教諭、放課後等デイサービス事業所支援員、主治医、保護者

ICF研修内容のポイント

1 場面とセットで状況把握する

- ・どんな場面なら「できる」かを見つけることの大切さ

2 情報の書き方

- ・具体的に書く
- ・最後は「できる」で終わる。できることに焦点化する。できないことはカッコ内に記入。

3 環境因子の考え方

- ・支援を成功させる環境設定は？
- ・調整が必要な環境因子は？

4 実技

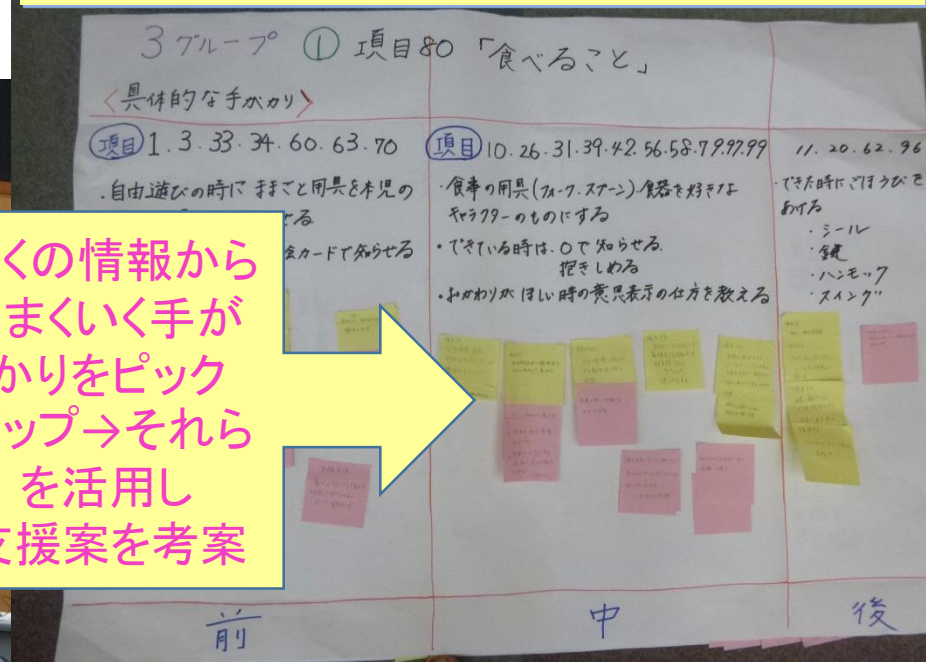
- ・「活動と参加」「環境因子」について、情報収集シートを用い実際に記入
- ・情報の分析、支援検討項目の決定方法、支援会議資料の作成方法
- ・支援がうまくいく条件(環境)、いかない条件の見つけ方

ICF研修会の様子

1つの支援項目について
支援案をグループで考案



多くの情報から
うまく手が
かりをピック
アップ→それら
を活用し
支援案を考案

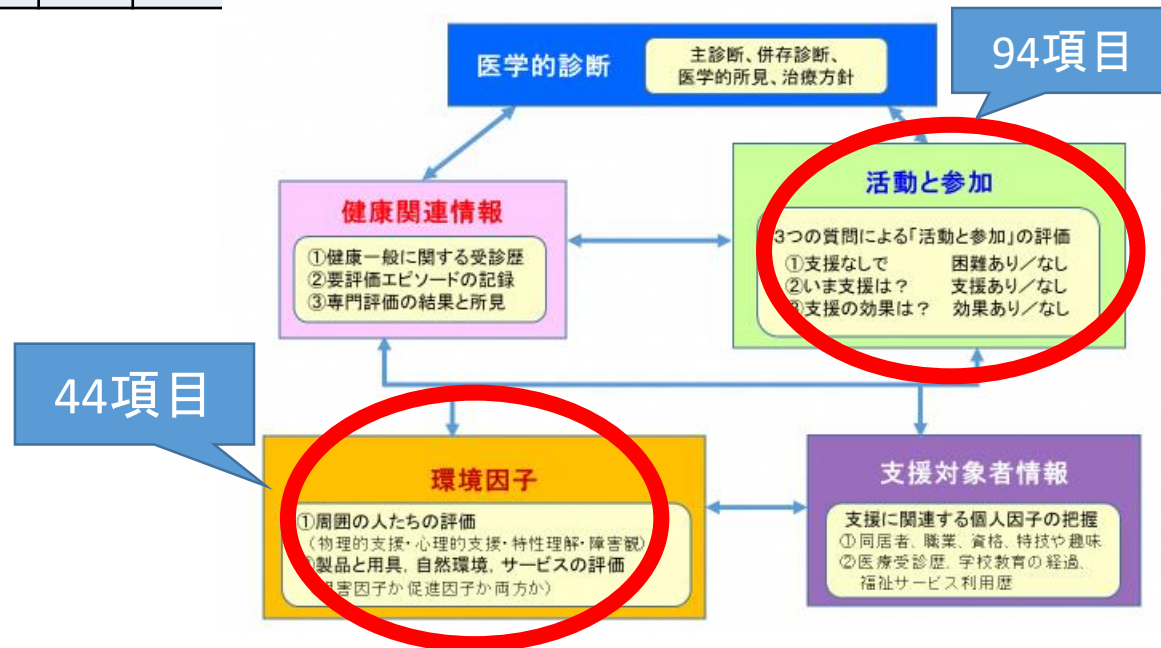


環境への気づきが多くあった

年間の流れ

	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
研修		第1回	第2回			第3回				
活用事例		情報収集開始		第1回支援会議	支援の実施			情報の再収集	第2回支援会議	支援の実施

ICF図式による情報把握・共有システム



情報収集役割分担

活動と参加

(支援員1人当たり約20項目)

家庭でしか分からない部分は、保護者に聞き取り

チームで分担することで、1人当たりの負担が少なくなる

内容	項目数	担当
第1章 学習と知識の応用	27	学校(10)、放デイ(17)
第2章 生活の中で求められる課題	9	学校(8)、放デイ(1)
第3章 コミュニケーション	16	学校(2)、放デイ(14)
第4章 運動・移動	15	放デイ(15)
第5章 セルフケア	8	学校(1)、放デイ(7)
第6章 家庭生活	2	放デイ(2)
第7章 対人関係	6	学校(3)、放デイ(3)
第8章 遊び、娯楽	9	学校(2)、放デイ(7)
第9章 コミュニティライフ・社会生活	2	放デイ(2)

計94項目

第1章 学習と知識の応用の項目例

項目タイトル	項目タイトル
d110)目的をもって見る	d150)計算の理解と習得
d115)目的をもって聞く	d1310-2)物を扱う遊びを通して学ぶ
d120)目的をもって触る・嗅ぐ・味わう	d1313-4)見立てやフリを通して学ぶ
d129)目的を持つその他の感覚経験	d155)必要な生活スキル(行為)の習得
d130)まねをして学ぶ	d159)その他の基本的学習活動
d132)知らないことを質問する	d160)何かに対する注意集中
d133)ことばの習得と使用	d161)課題(作業)完了までの注意持続
d134)代替・補足的言語手段の習得と使用	d166)実生活で読むこと
d135)繰り返して練習する	d170)実生活で書くこと
d137a)物の特徴の概念学習	d172)実生活で計算すること
d137b)心の状態の概念学習	d163)思考すること
d140)読むことの理解と習得	d175)問題を解決すること
d145)書くことの理解と習得	d177)意思決定すること
	d179)知識の応用(その他)

ICF研修

1 支援者のスキル向上

- ①情報収集のスキルアップ：情報を具体的に書く、場面とセットで状況把握することにより支援の効率化につながる
- ②支援の考案方法：具体的な情報（手がかり）から支援を考える、支援結果からうまくいく環境（条件）を考える
- ③支援会議の効果的な進め方

2 多職種連携

子どもの姿の共有

（文字資料だけでも実際の子どもの姿をイメージできる）

「具体的に情報を書く」「場面とセットで把握する」
「環境をみる」「会議をスムーズにすすめる」こと
⇒ ICFシステム活用に限らず普段の支援に重要
⇒ 地域支援体制の充実につながる

モデルケースへのICFシステムの活用

1 支援者のスキル向上

共通視点による子どもの網羅的な情報把握（ICFシステムの活用）により、

- ①子どもを見る視点の変化（場面や環境との関係で子どもを捉えられるようになった、本人視点で考えるようになった）
- ②支援計画の質の向上（支援者間で共通に思い描ける内容となった、具体的で生活適応の改善に役立ち評価しやすい内容になった、合理的配慮の記載が増えた）

2 家庭・教育・福祉の連携

把握された情報を共有する場（支援会議）の設置により、

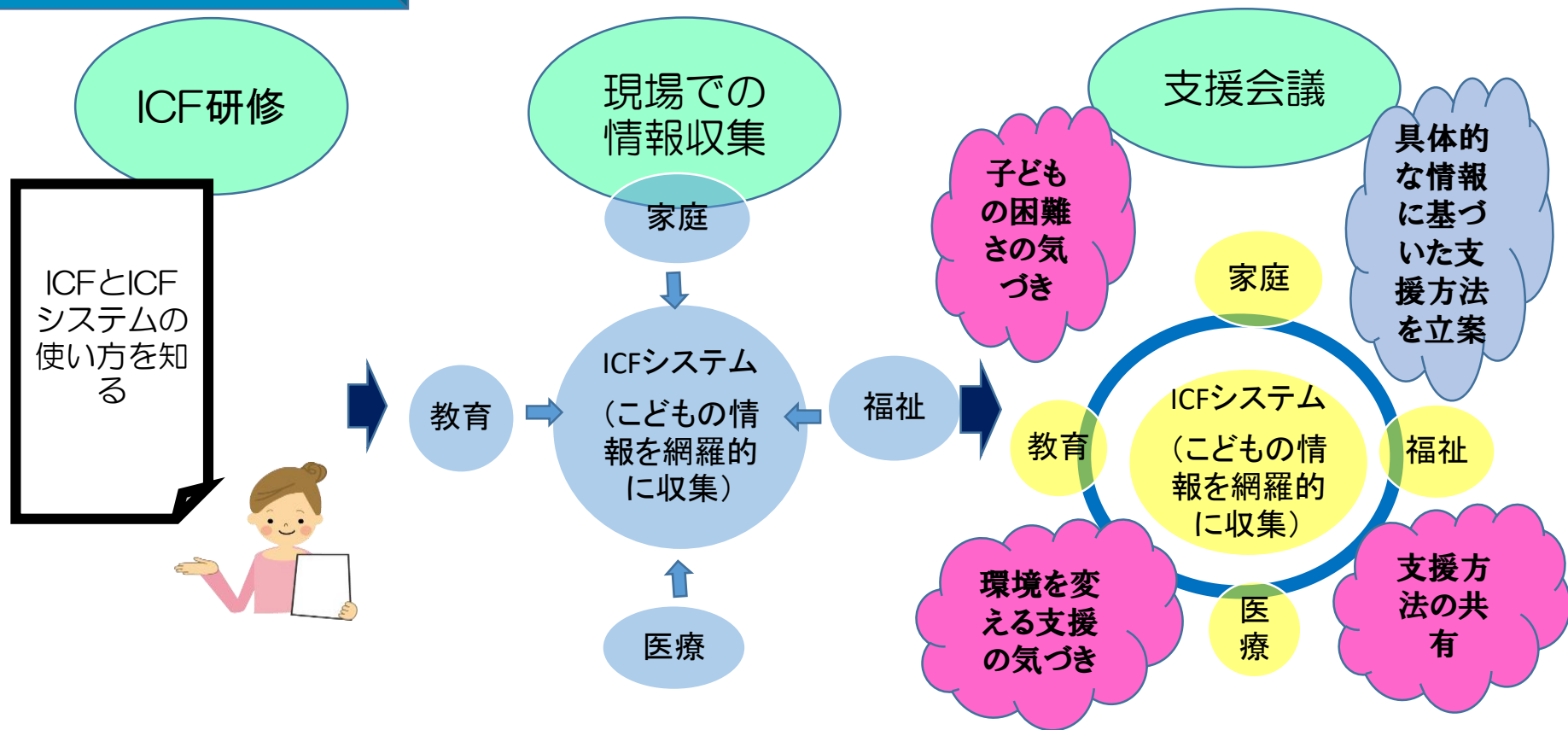
- ①子どもの姿の共有（立場や職種が違ってても、支援者側が子どものできる場면을共有できた）
- ②支援方法の共有（支援の統一と他の場面での効果的な方法も共有）

3 保護者支援

子どもの網羅的な情報把握（ICFシステムの活用）と支援会議への参加で

- ①子どもを見る目や育児への考え方が前向きに変化した
- ②精神的なゆとりがでた、支援者へ相談しやすくなった
- ③孤立感の解消につながった

まとめ



「共通視点による子どもの網羅的な情報把握（ICFシステム）の活用」と、「把握された情報を共有する場（支援会議）」の設置により、支援者のスキルアップ、家庭・教育・福祉の連携、保護者支援につながった。

ICF活用の課題と令和2年度以降の取り組み

1. 情報収集の項目数が多く、作業量が多い

★発達障害のICFコアセット導入で項目数を減らした情報把握シートの活用を通じて作業量の負担軽減をする

⇒北大で第1版開発完了：項目数は大凡半分程度となった

2. ICFの考え方がまだ浸透していない

★ICF研修を継続（ICFとその活用方法の知識を地域の支援者に広く普及する）

3. 継続していくことが大切

★支援者が使いやすく負担感の少ない活用方法の検討
（コアセット導入版ICFシステムにより使い勝手の向上と負担感の軽減が見込まれる）